

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより
第9号
2017(平成29)年9月26日
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

受け継ぎたい技術 — 緋(かすり)という技法 —

織物の世界に「緋」という技法があります。糸を染める前に糸の一部を他の糸で堅く括(くく)り、染まる部分と染まらない部分を意図的に作り出した糸(緋糸)を用いて、さまざまな文様を表す技法です。漢字では「飛白」と表記することもあり、掠(かす)れたような印象を与えるために「かすり」と呼ばれるようになったという説もあります。

緋糸の作り方にはいろいろな方法があります。大別すると上記の防染技法と、糸に直接染料をつける捺染技法に分けられます。さらに、防染技法の中にも最も基本的な「括り」のほか、「板締め」「機締め(織締め)」などがあり、捺染技法には「摺り込み」「櫛押し」「型紙」「ローラー」などがあります。緋糸づくりの技法の多様さは、日本の緋の大きな特色でもあります。

緋の技法は世界中に存在し、緋を意味する世界共通語としては「イカット・IKAT」が用いられているそうです。「イカット・IKAT」とはマレー語で「括る」の意。技法の発祥はインドで、インドネシア、東南アジアを経て、琉球(沖縄)に伝わったと言われています。

日本各地に緋の技法が急速に広まっていくのは江戸時代中期以後です。木綿の普及と深い関わりがあり、久留米緋をはじめ伊予緋、備後緋、広瀬緋、弓浜緋などが次々と生まれていきました。

おもしろいのは、これら各地の緋織りの創始者がはっきりしている場合が意外に多い、ということです。一般的に伝統文化というものは自然発生的に生まれた生活習慣や技術、習俗、芸能が長い年月の間に受け継がれ形成されていくもので、その明確な起源を明らかにしにくいものですが、緋にはその起源(創始者)がはっきりしている場合が多いのです。なぜでしょうか？

現時点での私の結論は、日本においては木綿の歴史そのものが浅いのに同様に、緋の歴史もそれほど古いものではないため、です。着物が日本の伝統文化であることは間違いありません。しかし、だからと言って「昔」から庶民が日常的に着物を着ていたわけではないのです。少なくとも木綿の着物、藍染の着物を日常的に着用するようになるのは江戸時代以降のことです。

そして、もう一つの理由は、それぞれの緋の技法が、その土地にとってはかけがえのない財産(特筆すべき産物)でもあった、ということです。

奈良には「大和緋」があります。宝暦年間(1751~1763)に御所の浅田松堂によって創始されたと言われています。一時期は全国にその名を知られ、その後は白緋において「西の大和緋、東の中野緋(群馬県)」と呼ばれるほどになります。ピークは江戸時代末期であり、明治末から大正期にかけてです。第2次世界大戦後は、生活スタイルが激変した煽りをうけて、需要は激減。洗練された高度な技術も受け継ぐ職人、後継者がいなくなり、昭和40年代頃に完全に途絶えてしまいました。

私が9月から通い始めた相楽木綿伝承館の機織り教室(中級)では、緋糸の括り方から学ぶことができます。ぜひとも身につけたい(受け継ぎたい)技術です。 **緋糸の括り方の練習 →**



----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成29年8月26日~平成29年9月25日)

福島県1、東京都4、神奈川県1、石川県1、長野県1、大阪府1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成29年8月26日~平成29年9月25日)

メールを含む各種相談件数2、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数1件3名



〈相楽木綿の緋糸の括り方〉

緋糸をつくるためには、糸の一部を他の糸で堅く括る必要があります。その括り糸は、通常は1箇所に1本ずつの糸を使います。ところが、相楽木綿では、複数箇所の括りを1本の糸で括ることができるのです。この方法は、「相楽木綿の会」のみなさんが、技術伝承を目的に、今から十年ほど前に古老への聞き取り調査を進める中で「発掘、発見」されたものです。

たまたまお話を聞くことのできた当時99歳のご婦人が、かつて緋糸の「括り」を専門に生業とされていた方で、数十年ぶり(約60年ぶり)に糸に触れるうちに、頭では忘れていたその独特の括り方を体が思い出し、その場で再現して見せて下さったことで明らかになった貴重な技術です。

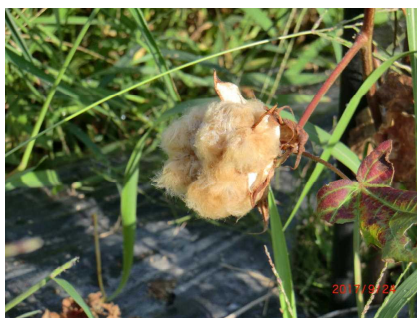
《綿の栽培記録 2017》－ 平成29年度版 その5－

9月に入ってから、毎日のようにコットンボールがはじけています。

今年は畝によって肥料の量を変えてみたところ、追肥をしなかった畝では実のつき具合が悪く感じられます。コットンボールの大きさは、和綿については全体的に例年に比べて少し小ぶりの感じがします。洋綿のコットンボールの大きさは例年並みです。

下段の写真は、収穫したばかりの和綿のコットンボール(左)、茶綿のコットンボール(中)、茶綿の木(右。2号畑)です。

白綿と茶綿はすぐに交配してしまうため、それぞれ別の畑で栽培するようにします。2号畑で栽培している茶綿は、3年前の種が発芽したものです。



【綿の加工の作業記録】 (梅田1人の作業量)

- ・糸車を用いての糸紡ぎ量 (洋綿)

8月26日～9月25日(作業実日数24日) 糸の総量106.1g(28.29匁) 総時間346分(5時間46分)

※1分間≒0.307g 1時間≒18.4g(4.9匁)

【研修等の記録】

- ・平成29年9月03日「相楽木綿伝承館：機織り教室中級①緯緋括り」(京都府相楽郡精華町)受講
- ・平成29年9月10日「相楽木綿伝承館：機織り教室中級②経糸巻き」(京都府相楽郡精華町)受講
- ・平成29年9月23日「奈良県立図書情報館」(奈良市大安寺西)訪問、研究
- ・平成29年9月24日「相楽木綿伝承館：機織り教室中級③整経」(京都府相楽郡精華町)受講

【以下の写真は、相楽木綿伝承館での整経作業の様子、整経台、緋糸の括り方です】

